

## 第19回

# 「多摩の縄文人とくらし —台地、川、海とのかかわりあい—」 平成27年（2015）

近年の関東の縄文時代研究では、多摩川や荒川の流域から東京湾岸への石器素材の流通や、土器型式から中部地方との文化の繋がりなどが解明されています。また縄文人の骨の研究から、生活や社会に関する研究も進んでいます。本講座では、最新の発掘成果をふまえつつ、武蔵野台地や多摩丘陵、多摩川・野川や荒川、東京湾岸のかかわりあいから、多摩の縄文人のくらしや社会を考える講座といたしました。

- |       |           |   |     |
|-------|-----------|---|-----|
| □第1講  | 9月25日(金)  | 戦後の縄文時代研究で明らかになった縄文人の生活と美<br>講師 石井則孝（元日本遺跡学会会長）   | 100 |
| □第2講  | 10月9日(金)  | 下総台地の貝塚にみる武蔵野との交流<br>講師 堀越正行（千葉市立加曽利貝塚博物館館長）  | 102 |
| □第3講  | 10月23日(金) | 自然人類学からみた原始・古代の関東の人々<br>講師 藤田 尚（新潟県立看護大学看護学部准教授）  | 104 |
| □第4講  | 11月6日(金)  | 縄文人たちは『野川』をどう感じ、どう暮らしたか—遺跡・土器の〈かたち〉から考える・入門—<br>講師 高麗 正（三鷹市教育委員会）   | 106 |
| □第5講  | 11月20日(金) | 見学会 モノ・人の動きから多摩・武蔵野の縄文時代を眺める—西東京市下野谷遺跡、多摩ニュータウンNo.72遺跡を基点として—<br>講師 山本孝司（東京都埋蔵文化財センター調査研究部）<br>会場 東京都立埋蔵文化財調査センター | 108 |
| ■石井則孝 |           | 「多摩丘陵・武蔵野台地の縄文時代」   | 110 |

定員 120名

場所 国分寺労政会館（第5講は見学会、東京都立埋蔵文化財調査センター）

平成27年9月25日 午後1時30分～3時30分

## 第1講 戦後の縄文時代研究で明らかになった縄文人の生活と美

石井 則孝（元日本遺跡学会会長）

### 1. 今回の講師の紹介

イ、堀越正行      ロ、藤田 尚  
ハ、高麗 正      ニ、山本孝司

### 2. 多摩の縄文時代研究の基礎を築いた先人たち

イ、山内清男      ロ、甲野 勇  
ハ、吉田 格      ニ、滝沢 浩  
ホ、柵 國男      ヘ、和田 哲  
ト、佐々木蔵之助      チ、渡辺忠胤

### 3. 旧石器の真の最初の発見者 昭和24年（1949年）

### 4. 文化財保護法の成立 昭和25年（1950年）法隆寺金堂の焼失

### 5. アジアの先史時代

### 6. 縄文時代の年代

### 7. 土器型式

### 8. 縄文時代の住居について

### 9. 縄文時代の土器・石器について

#### 10. 石材の取得と粘土の取得

#### 11. 黒曜石産地

#### 12. 貝塚の存在

#### 13. 武蔵野台地の拠点集落

イ、練馬区 石神井公園 扇山遺跡

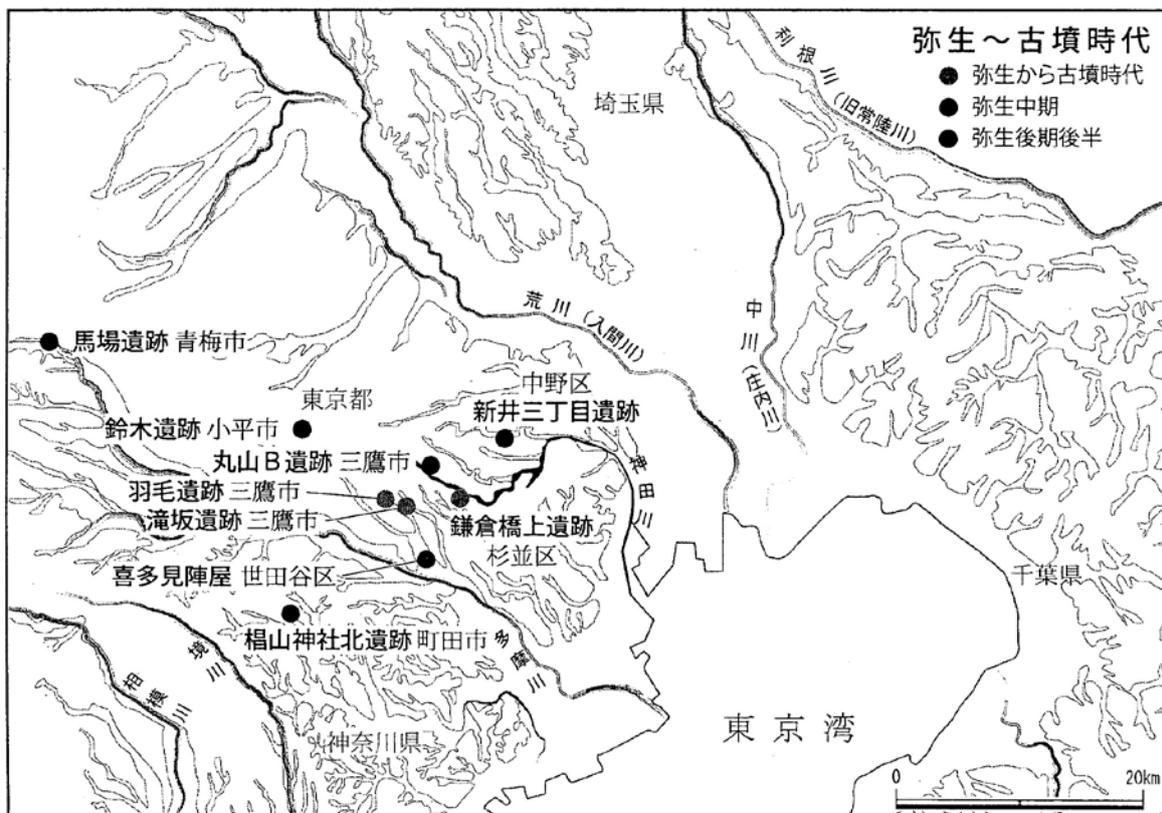
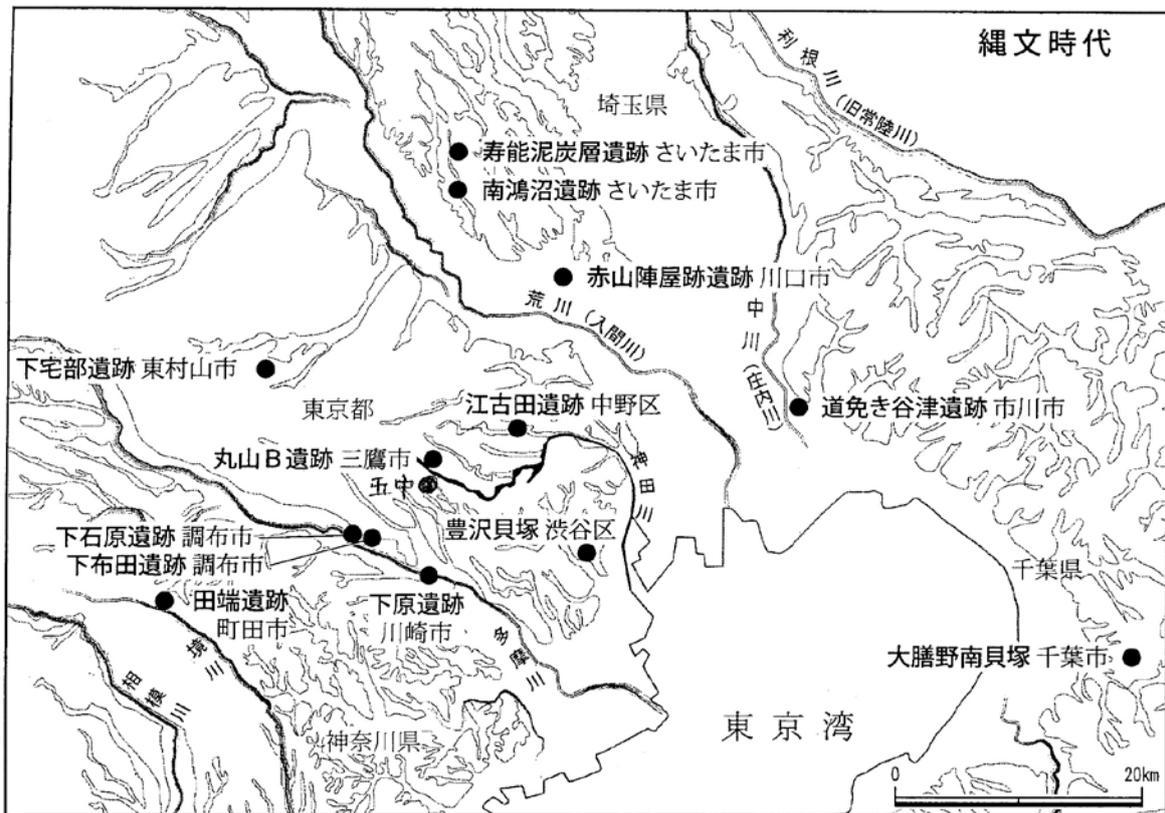
ロ、西東京市 東伏見 下野谷遺跡

ハ、三鷹市 市立第五中学校遺跡

ニ、多摩市 多摩ニュータウンNo.7・No.9遺跡

#### 14. 縄文土器を原始美術として考えられるか

#### 15. その他の縄文時代の諸問題



縄文時代、弥生～古墳時代の主要集落遺跡の分布  
 (中野区立歴史民俗資料館資料より)

## 第2講 下総台地の貝塚にみる武蔵野との交流

堀越 正行（千葉市立加曾利貝塚博物館館長）

### ★講座内容補足

#### A 先住民族論争

##### コロポックル説

…渡瀬荘三郎・坪井正五郎・大野延太郎は  
支持→アイヌ説

アイヌ説…白井光太郎・小金井良精・鳥居  
龍藏・濱田耕作

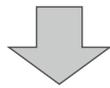
B 昭和3年に山内清男により発表された関  
東地方の土器序列

→勝坂式→加曾利E式→堀之内式

→加曾利B式→阿玉台式

C 西関東 東関東

勝坂文化 ⇄ 阿玉台文化



加曾利E文化

D グレイワッケ=硬砂岩

クロライト・シスト

= 緑泥片岩（秩父青石）

1、鳥居龍藏の有史以前武蔵野の「厚手式  
派・薄手式派二大部族説」

①大正7年、東京市の依頼で小学校の校長  
向けに講演会を6回にわたり行う

②「武蔵野の有史以前」『武蔵野』第3巻  
3号 武蔵野会 大正9年12月10日発行

③『武蔵野及其有史以前』磯部甲陽堂、大  
正14年3月25日発行（①の講演録）

厚手式土器=台地地方（武蔵～甲信飛な

ど）狩猟→厚手式派部族

薄手式土器=海岸地方（下総・常陸）

貝塚・漁人的生活→薄手式派部族

亀ヶ岡式土器=出羽の奥地（仙台・米沢  
以北）→出奥式派部族

2、大正13年の東京帝国大学人類学教室に  
よる加曾利貝塚発掘の成果

B 地点（甲野勇・八幡一郎）

貝層：薄手式（→加曾利B式）

黒褐色土層：薄手式（→堀之内1921年式）

E 地点

[恐らく貝層・黒褐色土層共に]

厚手式（→加曾利E式）

堀之内1921年式とは、後の堀之内1式  
土器

3、八幡・和島の『武蔵野』所収論文（「武  
蔵野台地の遺跡と遺物」『武蔵野』科学  
主義工業社 昭和16年5月25日発行）

A 「石材とか猟獣とかを以て、海岸の村々  
の海産物と交易して居つたとは思はれる」

B 「海岸の者も森林の者も相似た文化遺物  
を今日に残して居る」

4、渡辺誠の勝坂文化の東方伝播説

5、各地区の石器



平成27年10月23日 午後1時30分～3時30分

## 第3講 自然人類学からみた原始・古代の関東の人々

藤田 尚（新潟県立看護大学看護学部准教授）

### 概要

自然人類学は聞きなれない学問領域だと思います。発掘された古人骨を対象に、その形質やDNAなどの遺伝情報、霊長類との関連性、人類進化などを探求する学問です。非常に幅の広い学問ですが、今回の講演では、関東の原始・古代の人々はどのような人で、どこから来たのか、また骨に残った病気の痕から、彼らが生き抜いた生活環境や食性を、演者のこれまでの研究成果も交えてお話しします。

1. 縄文人と弥生人の形質の違い

2. 縄文人・弥生人はどこから来たのか  
—韓国調査の成果から—

3. 地道な海外（韓国）での調査と、現地の人々との交流

4. 現時点での縄文人と渡来系弥生人の形成を推測する

5. 関東地方の縄文人などにみられる歯や骨の病変から彼らの生き抜いた社会を考える

6. 原始・古代の人々の病気から現代の医療・医学を考える

7. 研究の舞台は世界 —楽しい国際学会での外国人研究者との交流—



山口県土井浜遺跡出土人骨の解説



人骨の形態の違いから生活を読み解く



関東地方の原始・古代人の人骨の解説

## 第4講 縄文人たちは『野川』をどう感じ、どう暮らしたか

—遺跡・土器の〈かたち〉から考える・入門—

高麗 正 (三鷹市教育委員会)

### 0 はじめに

#### (1) 人類史の長さや現代、縄文時代の位置づけ

- 縄文的気質・弥生的気質
- 私たちの血は狩猟民

#### 1 河川・湧水と遺跡のあり方・その意味するもの

##### (1) 武蔵野台地の地形と湧水源

- 湧水谷頭・湧水のメカニズム

##### (2) 都市河川としての野川と井の頭池

- 井の頭池空中写真

##### (3) 河川・湧水の利用と遺跡占拠・分布の関わり

##### (4) 食糧としての堅果類（ドングリ）と加工場

- 堅果類種別図・写真
- 西と東・2区分構造のはじまり

##### (5) 事例集落

- 野川水系・仙川（三鷹市第五中学校遺跡）
- 野川を掘る・低湿地遺跡（古八幡遺跡）
- 野川のほとり（小金井市・武蔵野低湿地遺跡）
- 井の頭池・神田川（井の頭池遺跡群、丸山A・B遺跡）参考／栃木県・矢瀬遺跡

### 2 石器で知る生業

#### (1) 人の手の延長としての道具→自分の「力」を超える

#### (2) 縄文時代の道具

- 作り方と使われ方（石器は引き算型・打製と磨製）・世界似たような形

#### (3) 自然への適用としての道具

- 残るものと残らないもの
- 石器と全体の形（飛び道具としての弓矢の登場）→ 組み合わせ道具
- 道具箱の中身（狩猟用／漁労用／採集植物調理用）→変わるもの（材質、技術、機能の細分化、消費量）と変わりにくいもの
- 装身具と信仰・呪術用（第2の道具の謎）

### 3 土器で知る暮らし

#### (1) 縄文土器の誕生・革命的なできごと

- 容器の誕生には
- 食生活の大改革（献立／栄養／安定／ゆとり→定住化など生活全体の変化→リサイクルと再利用と廃棄・生活様式



土器に触れて考える

(2) 土器づくりと文様

- 土器研究の理由
- 作り方と工程と器種・機能⇒日常雑器の土器と博物館に展示される土器
- 土器の文様
- 土器焼成と器形と文様帯
- 文様の付け方と縦の区画

4 土器の〈かたち〉で知る文化

(1) 縄文土器（タイプ）で文化を観る

- 時間のものさし（八王子市史・土器暦年代）
- 文化の地域性と交流（集団・文化圏）  
縄文土器の共通点と相違点

(2) 錯視と土器文様の変化

- 土器の〈かたち〉（形・文様）→人間行動→究極は「こころ」を探る。
- 知覚から読み解く縄文土器の解釈…

認知考古学から

- 土器文様は「凹と地・凹と凸」

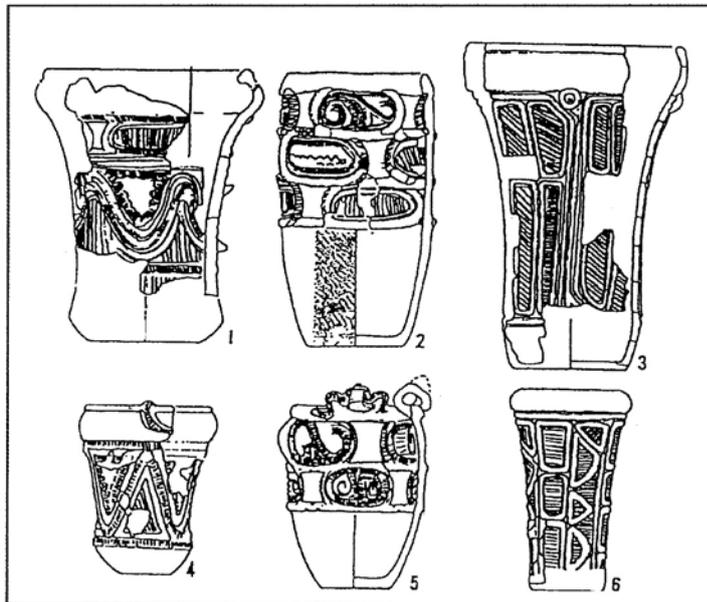
5 想像してみよう縄文人

(1) 縄文の世界～野蛮人・原始人？～世界に誇る縄文の時代

- 権力なし平等の社会／自然破壊なし／戦争なし
- スローライフ／無駄な浪費／効率的・機能性・生産性という現代人の価値観

(2) こんなことまで想像してみたい

- 芸術作品としての縄文土器（花器）を考えてみる→どんな事を考えてのデザインか
- 作品（出土品）の「美しい」もの、「かわいい」もの→どんな見方をしていたのか



▲左：調布市原山遺跡  
右：三鷹市新川市立第五中学校遺跡  
(同遺跡発掘調査報告書より)

◁上段：野川流域の遺跡出土品  
下段：神田川流域の遺跡出土品  
(三鷹市井の頭池)

同じように見えるデザインだが、「文様帯」の区切り方が2、3段と異なる例

宮崎博「土地と縄文人」  
『物質文化47』1986より

土器の文様帯の違いを読む

平成27年11月20日 午後1時～4時30分

## 第5講 見学会 モノ・人の動きから多摩・武蔵野の縄文時代を眺める

—西東京市下野谷遺跡、多摩ニュータウンNo.72遺跡を基点として—

山本 孝司（東京都埋蔵文化財センター調査研究部）

○多摩ニュータウン遺跡とは

○多摩ニュータウンNo.72遺跡

○No.72遺跡の中期集落

- ・所在地 八王子市堀之内2-8ほか
- ・典型的な（大規模・拠点）環状集落
- ・中期集落の変遷
- ・特徴

○西東京市下野谷遺跡

- ・所在地 西東京市東伏見2・3・6丁目
- ・平成27年3月 国の指定史跡となる。
- ・下野谷遺跡の中期集落
- ・下野谷遺跡東集落の変遷
- ・No.72遺跡のムラと下野谷遺跡のムラが共通
- ・環状集落の構造にあり、東側と西側にまとまりがある。西側と東側に偏りがある。2群に分かれる→（出自の異なる）2つの集団で集落を構成
- ・区分原理＝異なるリネージ（血縁集団）

○環状集落の構造はなぜ？

各地域の拠点であるから（大きなムラと小さなムラ）、モノ（資源）の安定した確保

○都内におけるヒスイ製品について

- ・点数 43遺跡77点（太珠は43点）
- ・中期に大量のヒスイが供給された。

○都内におけるヒスイ大珠の分布状況

- ・中期前半は多摩丘陵～武蔵野台地西部を中心とする内陸部に分布
- ・中期後半は、武蔵野台地東部～東京湾海浜部まで分布が拡大

↓

多摩丘陵（八王子区域）の拠点集落

→（分配）武蔵野台地西部の拠点集落

→（分配）武蔵野台地東部～海浜部の拠点集落

+

拠点集落から周囲の集落への再分配

○中部地方と関東南西部（武蔵野・多摩）でのモノの流通（想定）

拠点集落の出現（前期に萌芽、中期で盛行）モノ（資源）の確保、調達において、各地域の拠点集落が大きな役割を果たす。大きなムラと小さなムラ＝長期のムラと短期のムラ

当時の地域社会を維持する上での集落どうしの関係（優位度）

「土器の地方型の存在形態は、住民が数百人（時には数十人から千人以上）の人員からなる多数の部族に分かれ、その若干が同一の土器型式を用いるという事を想像すれば理解しやすいであろう」山内清男、1964年



講義風景 東京都立埋蔵文化財調査センター



遺跡庭園



遺跡庭園内の縄文時代前期竪穴住居



住居址内の敷石



東京都立埋蔵文化財調査センター 常設展示室

## 多摩丘陵・武蔵野台地の縄文時代

石井則孝（元日本遺跡学会会長）

平成27年度の多摩の歴史講座では、第1講の全体像を石井が担当し、第2講を丘陵・台地・海の関係から、千葉市立加曽利貝塚博物館館長の堀越正行さんが、集落と貝塚の関係を語り、第3講を人類学の立場から新潟県立看護大学の藤田尚さん、第4講を長年三鷹市教育委員会で台地の集落を掘ってきた高麗正さんが、野川から多摩川流域に広がる集落遺跡について縄文人になったつもりで語っていただいた。第5講は東京都立埋蔵文化財調査センターの見学会で、同センターの山本孝司さんに多摩地域と中部地方との関係話を話していただいた。

私の講座の内容は注目されている練馬区扇山遺跡、西東京市の下野谷遺跡、三鷹市の第五中学校遺跡をとりあげた。

縄文人は、どのような環境の台地を選んで住み続けていったのか。森と林があり、背後に川や池のあるところを選び、四季を通して食物の確保が可能な場所に定住を行っていた。

この典型が、双環状に住居を形成していた下野谷遺跡で、遺跡に立つとそれがわかる。また、丸木舟の利用は縄文人の行動範囲をひろめ、黒曜石の確保は長野県の和田峠が中心であったが、海産物の流通は丸木舟を使つての南の島々への行動がわかり、南の島からも石器の原材料を運んでいた。

かつて中学生時代、佐原真さん、滝沢浩さんなどと石神井川流域の縄文時代遺跡で遺物を採集していた頃、解らない土器があると東大の山内清男先生、近いところでは武蔵野郷土館の甲野勇先生、吉田格先生などに鑑定していただいていた。昭和24年だったか、滝沢浩さんと板橋区茂呂遺跡で、縄文早期の土器片を採集していた時、黒土下のローム層中から黒曜石片2点を採集した。まさか赤土の中に黒曜石片があるとは…。二人は驚き、鑑定のために武蔵野郷土館へ持ち込んだ。「ローム層中に黒曜石などあるはずがないだろう。ロームは火山灰の固まったもので、だから赤い色をしているのだ。人なんて住めない時代で上から紛れ込んだものでは…云々」と強く言われ、中学生の身ではスゴスゴと帰らざるを得なかった。その後、滝沢浩さんが明治大学に入ってから、研究室が茂呂遺跡を調査したところ、ローム層中から茂呂タイプとよばれる旧石器を発見し、貴重な石器として認識され、常時明治大学の博物館で見ることが出来る。当時研究が進んでいたならば、日本の旧石器時代の始まりは群馬県岩宿遺跡ではなく、「板橋区茂呂遺跡」として登録され、滝沢・石井の名は永遠に残っただろうと笑ったものであった。

ともかくこの武蔵野台地と多摩丘陵は、信州や山梨の遺跡に匹敵できる縄文時代の宝庫であり、研究のメッカでもある。梶國男さん、和田哲さんなどは、縄文時代研究者として永遠に記録されていくべきであろう。荒川・石神井川・善福寺川・多摩川に深い思いを表わして、東京の縄文時代研究がさらに深まることを祈念して結びとする。